

保育の中の物語(11)

「はじめね」を言うまでに

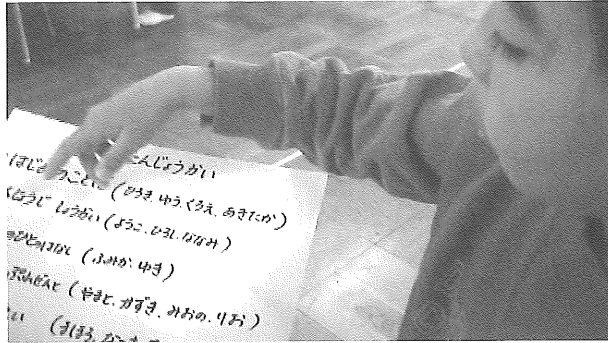
～ 謝るじよよりも、

謝るまでの心の動き ～

岸井慶子

二年保育年少組の冬。朝の保育室。何だか今日ほうきうき、そわそわした雰
囲気だ。数人の子どもたちが壁に貼ってある一枚の画用紙の前で何やら話して
いる。通りがかりに見たり触ったりしていく子どももいる。

A君がその掲示物を持って、大きな声で読みながら保育室中を行進するよう
に歩きまわり始めた。私の所にやってきて、その紙をこちらに見せながら説明
してくれる。今日は誕生会。その係の仕事と分担者が書かれているのだ。今ま
で毎月年長組が進行していた誕生会を、今月初めて自分たちが任されることにな
ったのだ(なるほど、ウキウキするはずだ)。A君が大きな声で読む。「は・
じ・め・の・こ・と・ば。Bちゃんでしょ、Cちゃん。お誕生日の人出てきてくださ
い。Dちゃんでしょ、Eちゃんでしょ。園長先生出てきてください。……これ



は、おれさま」と弾んだ声で一部始終を教えてくれる。何度も読んでいるうちに、A君の声が独特のリズムを帯びてくる。ちよつと調子の外れた自分流のメロデーをつけて、次々登園してくる子どもたちの間を歌い巡る。「今日はこんな楽しいことがありますよ」「みなさん、誕生会のお仕事をするんですよ」と誇らしさや期待をふれまわっているかのようだ。

突然テラスで悲鳴のような泣き声が上がった。同時に、A君がテラスから室内に入ってきた。先程までの笑顔とは全く異なる顔つきだ。足早に子どもたちの間を抜け、カメラの脇を通り、廊下へ出た。まるで逃げるように。「どうしたのだろう」と思っただけでいると、A君は廊下の途中でくると向きを変え、保育室に戻ってきた。今度は肩を落とし、うなだれて、テラスからは遠い机の周りを8の字を描くように歩き回る。手の甲でしきりに目をぬぐい、目をパチパチと瞬かせている(泣いている。何が起きたのだろう。こんなにしょげて)。

一方、テラスのF君の周りには人だかり。保育室中の子どもが集まった。たった一人であらうろしながら涙をこらえるA君の様子とは対照的だ。「A君が後ろから引つかいたんだよ」とI先生に説明する子、F君を慰める子。心配そうに見ている子などなど。I先生はそれらの訴えを受け止めながら「A君にも何かわけがあったのかしらね」とひとこと投げかけている。



A君は部屋の隅にあるままごとコーナーに行くと、キッチンセットの上に乗って壁に背中をびったりつけて腰かけた。両足をぶらぶらと動かし落ち着かない。目はうつろだが視野の内にはF君を囲んでみんなが心配している光景がある。自分の引き起こした出来事の結果をかみしめるようにA君は黙っている。

B子が筆者の所に来て「あのねA君がね、F君のこと後ろからこうやって泣かしたの。F君なんにもしないのに」とわざわざ説明してくれる。A男びいきになっている私は思わず「そうかな？ 何か理由があつたんじゃない？ A君に聞いてみれば？」と応じた。B子は「うーん」と頭を傾けながら少し困つたような照れ笑いをし「やだ、A君意地悪なんだもん」と言つてその場を去つた（トラブルの本当のことは知らないまま、伝聞や想像が積み重ねられ、それぞれの子のそれぞれの子に対するイメージがつくられていくこともあるのだと気づいた。このA君のトラブルも、A君が得意になつて歌つた歌をF君が「変な歌、やめて」と言い、それに反応したA君が後ろから軽くたたいた時に、たまたまF君の首を引っかけてしまったというものだった。子ども同士のトラブルは、それをとりにまく周囲の幼児の反応も非常に興味深い。子どもが何をどう見ているのか、子どもの本音にふれられることがあるので）。

F君がI先生と一緒に保育室に入ってきた。ピアノの脇で薬を付けてもらう



と保育室の中央に向かって一人でゆっくり歩き出した。その瞬間、保育室の隅のままごとコーナーからA君が素早くF君に駆け寄った。そしてF君を抱きかかえるようにして耳もとで「ごめんね」を言い、すぐにその場を離れた。F君はすでに気持ちの切り替えが済んでいたのだろう、キョトンとした表情で受け入れ、トラブルは解決した。担任の先生はそれを黙ってほほ笑みながら、さりげなく見届けていた。あつという間の出来事だった。

「わたしの まちがひだった。わたしの まちがひだった。こうして 草にすわれば それがわかる」という八木重吉の短詩がある。自分の行いを真に反省することは難しい。この詩のように、孤独な作業だ。考えるきっかけとなる出来事、それを一人で受け止める十分な時間や場所、そしてA君の担任のI先生がそうであったように、A君のことを追い詰めず、温かく受け止め、待っていてくれる人が必要だと思った。このエピソードに対して「A君の歌をけなしたF君への指導はどうなっているのか。A君だけが謝るべきか」という指摘をいただいたことがある。どちらが悪いのか、どう指導すべきなのかの前に、自分のできたことを必死に受け止めているA君の、このけなげな姿に目を向けることが、傍らにいる大人として大切なのだと思う。

(鎌倉女子大学短期大学教授)